

仙台市文化財調査報告書第29集

宮城県仙台市

郡山遺跡 I

—昭和55年度発掘調査概報—

1981・3

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第29集

宮城県仙台市

郡山遺跡 I

—昭和55年度発掘調査概報—

1981・3

仙台市教育委員会

序 文

郡山地区は、古くは名取郡茂ヶ崎村にあって、仙台城下に供給する近郊農村として栄えてきた所と言われています。広瀬川・名取川に包囲されて肥沃な耕土と温暖な気候や大消費地に近接している等の地の理は、長いこと開かな農村景観をみせていました。また、古くから古瓦や土器等の散在する所として学識者（によって）の注目を浴び、仙台市内にある著名な遺跡としても照会されてきた所でもあります。しかし近年市街化拡大の波を受け、宅地開発が急速化しつつあります。

昭和54年になって、初の調査が実施され、古代官衙跡の様相をうかがえることが報告され、その後、県や文化庁との協議を重ねた結果、国庫補助事業として、今後5ヶ年（計画）を目指し、郡山遺跡の緊急範囲確認調査が実施される運びとなり、今年はその初年次に当っています。発掘調査は8月から12月に及び、樋木と大溝をもって外郭とする施設が検出され、方四丁の広範囲にわたって区画された古代官衙跡であることが、判明し、造営年代も7世紀末から8世紀初頭という多賀城以前に遡る可能性もあるという古代東北の開拓史を解明する上で、大きな波紋を投げかける貴重な構造の発見となったのであります。

発掘調査及び調査整理に關しましては多くの市民各位、及び東北地方の学識者諸氏をはじめ、本遺跡の発掘指導委員会（委員長・伊東信雄）の先生方の御協力や御指導、助言に負うところ甚大であり、深く感謝申し上げる次第であります。

本報告書が市民各位はもとより、学徒諸兄の参考・活用を念ずるとともに、当市の文化財保護思想の普及啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の昭和55年度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 I～IV、V1・2・4、VI、VII・2・4……木村浩二

V 3……長島栄一（東北学院大学学生）

VI 3……青沼…民

遺構トレース……木村・青沼

遺物実測・トレース……青沼・長島が行い、木村が補足した。

編集は木村が行った。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で高さは標高値で記した。

5. 平面位置を表示する相対座標は、相対座標原点を任意に設置したNo.1原点 ($X = 0$, $Y = 0$) としている。

6. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

7. 郡山遺跡の遺構略号は次のとおりとした。

S A 柱列跡・柵木列

S B 建物跡

S D 溝跡

S I 縦穴住居跡・縦穴遺構

S K 土壙

S X その他の遺構

8. 本概報中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970) を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
1. 調査体制	1
2. 那山遺跡現況図の作製について	2
II 調査計画と実績	5
III 調査に至る経過	7
IV 遺跡の位置と環境	8
1. 地理的環境	8
2. 歴史的環境	8
V 第1・2次発掘調査	10
1. 調査経過	10
2. 発見遺構	10
3. 出土遺物	13
4. まとめ	15
VI 第3・5・6次発掘調査	16
1. 第3次発掘調査	16
2. 第5次発掘調査	17
3. 第6次発掘調査	17
VII 第4・7・8・9次発掘調査	18
1. 調査経過	18
2. 発見遺構	18
3. 出土遺物	23
4. まとめ	30

図 版 目 次

図版 1	都山遺跡航空写真	33
図版 2	1次調査区南トレンチ全景	34
図版 3	1次調査区北トレンチ全景	34
図版 4	1次調査区西トレンチ全景	34
図版 5	2次調査区全景	35
図版 6	2次調査区 S B14建物跡	35
図版 7	2次調査区 S B13・14・17建物跡	36
図版 8	2次調査区 S B13・14・17建物跡	36
図版 9	2次調査区 S B15・16建物跡柱穴断面	36
図版10	2次調査区 S B13建物跡柱穴断面	36
図版11	4次調査区 S D35溝跡、S B31建物跡	37
図版12	4次調査区 Aトレンチ S A33柵木列	37
図版13	4次調査区 Aトレンチ S A33柵木列	37
図版14	4次調査区 Aトレンチ S A33柵木列土層断面	37
図版15	4次調査区 S A33柵木列、S D35溝跡検出面	38
図版16	4次調査区 S A33柵木列、S D35溝跡	38
図版17	4次調査区 S A33柵木列	38
図版18	4次調査区 Dトレンチ S A33柵木列	39
図版19	4次調査区 S B32建物跡柱穴断面	39
図版20	4次調査区 S B31建物跡柱穴断面	39
図版21	7次調査区全景	40
図版22	7次調査区 S B51建物跡	40
図版23	7次調査区 S B51建物跡柱穴断面	40
図版24	7次補足調査区 S B51建物跡、S A65柵木列	41
図版25	7次補足調査区 S B51建物跡、S A65柵木列	41
図版26	7次補足調査区 S B51建物跡柱底面	41
図版27	7次補足調査区 S B51建物跡柱	41
図版28	1・2・6次調査区出土遺物	42
図版29	4・7次調査区出土遺物	43
図版30	4・7次調査区出土遺物	44

I はじめに

1. 調査体制

昭和55年度は都山遺跡発掘調査の5か年計画の初年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課

課長 水野昌一

主幹兼文化財調査係長 早坂春一

文化財調査係 上事 本村浩二、教諭 青沼一民（調査・整理）

教諭 加藤正範、主事 結城慎一、柳沢みどり、篠原信彦、金森安孝、
工藤哲司、齊藤裕彦（調査）

文化財管理係 係長 鈴木昭三郎、主査 鈴木高文、主事 山口 宏、渡辺洋一

調査補助員 森 刚男（調査）

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

会長 伊東信雄（東北学院大学文学部教授 考古学）

副会長 佐藤 巧（東北大学工学部教授 建築）

委員 後藤勝彦（多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 考古学）

工藤雅樹（宮城学院女子大学助教授 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部助教授 考古学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、文化庁 阿部義平、岡田茂弘、北海道大学助教授 林 謙作、国学院大学助教授 小林達雄、東北大学農学部教授 庄子貞雄、岡助子 山田一郎、秋田県弘田柵跡調査事務所 船木義勝、秋田市教育委員会 小松正夫、盛岡市教育委員会 八木光則、水沢市教育委員会 伊藤博幸、宮城県教育庁文化財保護課、中新田町教育委員会 中島 直

発掘調査および遺物整理にあたり次の方々の協力を得た。

地権者

赤井沢久治、齊藤芳雄、北山せい子、大友勘次郎、齊藤助治、庄子勇、小林かちよ、渡辺久治

調査参加者

長島栄一、柏 実、赤井沢まり子、赤井沢進（以上整理も含む）今野富美子、小島美和子、小島市子、小林てる、赤井沢喜久子、赤井沢さだ子、佐藤光子、真山尚幸、巻野俊夫、村田晃一、本田雄一、及川浩子、田中千登勢、熊谷育子、佐々木安志、庄子博之、宮城多恵

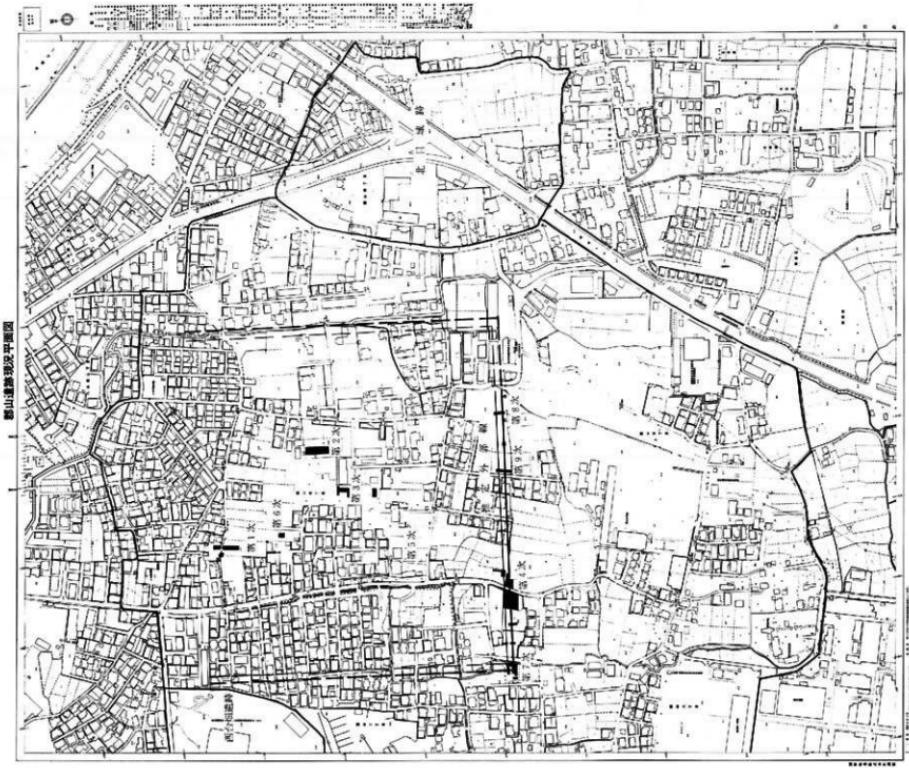
2. 郡山遺跡現況図の作製について

広範囲にわたると考えられる遺跡の数年におよぶ発掘調査を実施するにあたり、調査の性格上、一定の精度が要求されることから遺跡の広がりが予想されている範囲の詳細な地形図と、調査が予定されている地区に測量基準点が必要となり、1/1,000、1/2,500地形図の作製と調査基準点の設置を委託した。基準原点No.1は遺跡のほぼ中央に任意に設定し、座標系はこのNo.1 ($X=0$ 、 $Y=0$) を通る磁北線を標準としてある。基準点は合計で33点である。

表1 調査基準点、成果表

点名	X	Y	H	備考
No.1	0.000	0.000	10.163	
No.2	20.164	-62.893	10.100	
No.3	34.942	-116.358	9.967	
No.4	25.289	-209.052	9.657	
No.5	143.986	-195.598	10.142	
No.6	229.158	-193.894	10.502	
No.7	318.396	-190.587	11.374	
No.7-1	303.803	-196.319	11.243	
No.8	315.151	-132.495	11.590	
No.9	298.936	-95.860	11.633	
No.10	228.633	-18.147	11.880	
No.11	259.688	52.282	11.594	
No.11-1	163.398	23.345	11.121	
No.12	137.617	15.597	10.987	
No.13	81.375	4.719	10.843	
No.14	131.393	137.559	10.307	
No.15	-37.760	-82.546	9.931	
No.16	-12.567	34.462	9.961	
No.17	-26.457	200.989	10.089	
No.18	-109.126	149.572	9.728	
No.19	-102.633	63.965	9.915	
No.19-1	-99.082	64.661	10.086	
No.20	-218.865	-28.627	8.966	
No.21	-412.805	-143.246	7.094	
No.22	-421.011	-234.517	8.055	
No.23	-282.032	-214.216	9.271	
No.24	-247.346	-286.628	9.412	
No.25	-222.096	-275.369	9.155	
No.26	-151.516	-231.142	9.027	
No.26-1	-155.226	-231.484	8.995	
No.419	-273.735	-235.121	9.459	
No.420	-318.497	-100.259	8.273	
No.421	-372.940	-99.925	7.772	

图1 国 焦山道路现况平面图



II 調査計画と実績

昭和55年度の発掘調査は前年度に行なわれた開発行為に伴う事前調査の成果を踏まえて策定された「郡山遺跡発掘調査」の5ヶ年計画案にもとづく初年次にあたる。発掘調査費については国庫補助金額の決定（総経費850万円、国庫補助金額425万円、県補助金額212万5千円）を待って、次のような実施計画（案）を立案した。

表2 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期積	調査期間
第1次	推定外郭線北辺地区	100m ²	8~9月
第2次	推定外郭線内中央地区	330m ²	8~9月
第3次	*	100m ²	9~10月
第4次	推定外郭線南西コーナー地区	130m ²	10~11月
計	4地区	660m ²	

第1次調査区は推定方三町外郭線の北辺と考えられる道路をはさむ南北2ヶ所と一部道路敷内の1ヶ所で、推定北辺の内外両側を連続して調査区設定が可能なのはこの地区だけである。第2次調査区は推定方三町外郭線内のほぼ中央部にあたり、第3次調査区はその西側に隣接する地区で表土直下に石敷面の存在が確認されていた。第4次調査区は推定方三町外郭線の南西コーナー部にあたり、道路および水田境界土手をはさんでる地点から調査を実施した。

第1次、第2次調査は夏の異常気象の影響で、連日降雨と湧水に悩まされたが、竪穴住居跡や大規模な掘り方をもつ掘立柱建物跡等の遺構を発見した。第3次調査区は存在が確認されていた石敷造構は古代のものではないことが判明し、その下層からいくつつかの掘立柱跡を発見したにとどまった。その後、住宅建築に伴う発掘届が3件提出され、1件は3次調査と合わせて調査を行い、他についても第5次、第6次として緊急調査を実施し、第6次調査では竪穴住居跡を1軒発見した。

第4次調査は稻刈りを待って実施されたが掘立柱建物跡や外郭線南辺と考えられる大溝、柵木列を発見し、これが当初の予想を上回る規模に広がったので、急提、文化庁、県と協議の末、計画を変更し国庫補助金の追加（追加総経費100万、国庫補助金額50万、県補助金額25万）が決定したことから次のような実施計画書（案）を立案した。

第4次調査を続行して外郭南辺の構造、規模を究明する一方、当初の南西コーナーからさらに西に一町延長した地区で7次調査を実施し、南辺東側部分で第8次、第9次と遺構の確認調査を実施した。調査は12月下旬に完了した。

表3 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査期間
第4次追加	外郭線南辺地区	470m ²	12月
第7次	外郭線推定南西コーナー地区	130m ²	12月
第8次	外郭線南辺地区	75m ²	12月
第9次	〃	90m ²	12月
計	4地区	765m ²	

表4 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	推定外郭内北西地区(WO・WJ区)	125m ²	8月18日～9月18日
第2次	〃 中央区(WJ区)	300m ²	8月11日～9月20日
第3次	〃 中央区(WJ・WE区)	125m ²	9月19日～11月4日
第4次	外郭線南辺(SW・SX区)	530m ²	10月23日～12月22日
第5次	推定外郭内南西区(WD区)	20m ²	9月16日～9月17日
第6次	〃 北西区(WJ区)	20m ²	9月25日～10月4日
第7次	外郭線南西コーナー(SW区)	125m ²	11月19日～12月25日
第8次	〃 南辺(SY区)	42m ²	12月12日～12月19日
第9次	〃 (SY区)	57m ²	12月10日～12月19日
合計		1344m ²	8月11日～12月25日

III 調査に至る経過

郡山遺跡（仙台市文化財登録番号C-104）は諏訪神社北方の畠を中心に瓦が散布する地区とさらにその北方に土師器・須恵器が散布する郡山三丁目遺跡（同C-207）とが連続する形で知られていた。

この遺跡に学識者の目が向けられたのは大正3年のことで、当時は名取郡茂ヶ崎村に属し、煉瓦工場により粘土の採掘が行なわれていた折、石製品・土師器・須恵器などが発見され、その中に漆液を容れた平瓶があったことから、当時の宮城図書館長であった山中樵氏がこれに注目し、「考古学雑誌」に発表している。（註1）氏はこの中で付近の地理的・歴史的環境や地名などから、この地に「郡家」が存在していたのではないかと述べている。またこれについては伊東信雄氏も「北目古代聚落址」として仙台市史の中で詳細に述べている。（註2）

諏訪神社北方の瓦散布地についても故内藤政恒氏や伊東信雄氏が早くから注目し、出土した重弁蓮華文軒丸瓦の瓦当文様からみて、内藤政恒氏は平安中期のものとし、瓦散布地を名取郡衙の所在地ではないかと推定しているが、（註3）伊東信雄氏は平安初期を降らないものとし、寺院址の存在を推定している。（註4）

昭和54年に入り、郡山三丁目205-1、206-1において開発行為が計画され、地権者、庄子勇氏、斎藤英七氏との協議により、記録保存の事前調査が、仙台市教育委員会により行なわれ、多数の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壤などとともに多量の土師器・須恵器・円面鏡などの遺物が出土し、7世紀末から8世紀初頭の官衙跡との見方が強まった。（註5）

これらの成果をもとに、この地区を再度検討した結果、三町四方程の真北線を基準にした方形区割線が推定され、郡山という地名が残っていることなどからも郡衙跡と考えられるに至った。この地区は仙台市街の南に位置する近郊農業地帯として開けていたが、近年宅地化が急速に進み、このまま放置すれば遺跡が完全に破壊されてしまう恐れもあることから、文化庁、宮城県教育委員会との協議のうえ、遺跡の範囲と性格を明らかにするため昭和55年度から5ヶ年計画で発掘調査を実施することになった。



郡山中学校西側の瓦出土状況（昭24年冬）伊東信雄氏 撮影

IV 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

遺跡は郡山二～六丁目に及び、西は東北本線長町駅から、東は国道4号線仙台バイパスまで、南は現在の諏訪神社境内から、北は八木松地区との境界付近まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。この中で、推定方四町外郭線の宮街ブロックは中央北寄りの一角を占め、諏訪神社周辺の瓦を多量に出土する地区はほぼ南端中央部に位置している。

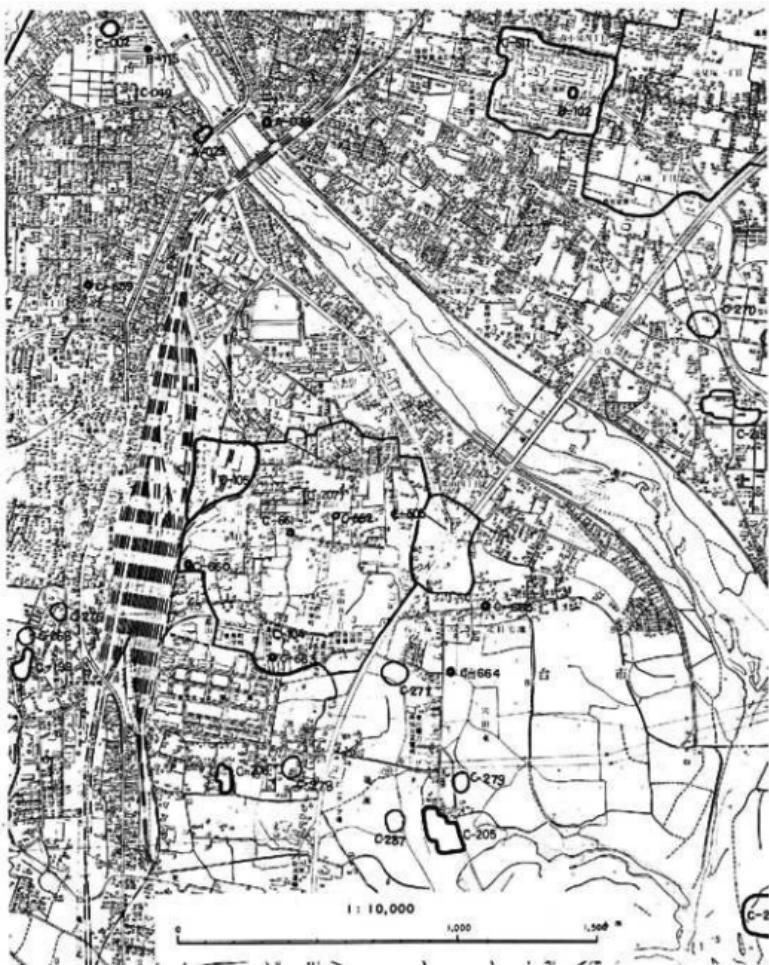
遺跡の北側は広瀬川が形成した標高が10～12mの自然堤防で、南につれて低くなり、標高6～8mの名取川の氾濫原へと移行する北高南低の土地で、遺跡の南には旧河川の痕も観察される。現在も北から東にかけては広瀬川が流れ、南方約1.5kmには名取川が東流し、南東2kmのところで両河川は合流し、6km下流で太平洋に注いでいる。西方は現在の長町市街を介して4km程のところには標高100～120mの大年寺・西多賀の丘陵が続いている。南・北・東に河川、西に丘陵という三角地帯の東辺に位置するこの地区は天然の要衝ともいえ、古くから街道にも隣接している。また、仙台平野と名取平野の中間地帯にあたり古くから広瀬・名取両河川の水利に恵まれた耕土として開けていた。

2. 歴史的環境

郡山遺跡周辺は他の遺跡も多く、北西部で隣接する西台畠遺跡（C-105）からは以前に地下5mから縄文土器、地2mから弥生土器が出土した記録がある。諏訪神社の南方400mには的場遺跡（C-206）、同じく籠ノ瀬遺跡（C-278）がある。遺跡の東南部には隣接して矢来遺跡（C-277）、500～800m離れて土師器、須恵器の散布する欠ノ上遺跡（C-205）、欠ノ上I遺跡（C-287）、欠ノ上Ⅱ遺跡（C-279）がある。また、東側には隣接して、15世紀に栗野大膳が居館とし、後、伊達政宗が居城とした北口遺跡（城跡C-505）がある。さらに周辺には14世紀初めの古碑群が点在している。

これらのことから、この地域は先史時代から古代・中世・近世を経て現在まで連続と文化を受け継がれてきた地域であることが理解されよう。

なお郡山は、藩政期には「郡山村」という近世農村の一つであったが、明治22年に平岡村と根岸村を合併した長町と統合され、「名取郡茂ヶ崎村」となり、さらに大正4年に「長町」となり、昭和3年に仙台市と合併された。



- | | | |
|---------------|--------------|----------------|
| C-104 郡山遺跡 | C-277 矢来遺跡 | C-660 長町駅裏古碑 |
| C-105 西台畠遺跡 | C-278 蓿ノ瀬遺跡 | C-661 八幡社古碑群 |
| C-205 欠ノ上遺跡 | C-279 欠ノ上Ⅲ遺跡 | C-662 郡山三丁目古碑群 |
| C-206 的場遺跡 | C-287 欠ノ上Ⅳ遺跡 | C-663 離訪社古碑群 |
| C-207 郡山三丁目遺跡 | C-505 北日城跡 | C-664 穴田東古碑群 |
| C-208 長町六丁目遺跡 | C-659 胡渠師古碑群 | C-665 宅地古碑群 |

第2図 遺跡位置図

V 第1・2次発掘調査

1. 調査経過

第1次調査区は推定方三町の北辺にあたる地区で、ほぼ東西方向に既設道路があり、調査トレンチはこの道路の南北両側にまたがる様に幅5m、長さ25mで設定し、さらにその西側に補助トレンチとして3×5mの西トレンチを設定した。この地区は現在畠地として使用されており、耕作による擾乱が深くまで及び黄褐色土色山面まで掘り下げ遺構の検出を行った。遺構検出面は3層目でその上層からも遺物が出土している。

第2次調査区は推定方三町内のほぼ中央部にあたり、現在は畠となっていて大手返し等により擾乱が著しい。トレンチは幅10m、長さ30mに設定し、表土擾乱土を機械で排斥した。黄褐色土色山面まで掘り下げ遺構の検出を行った。擾乱は地表下約1mまで及び、耕作土下に2回の大手返しの痕がみられた。発見された遺構は人形の柱穴を持つ掘立柱建物跡5棟、溝跡4条、土壙2基であるが建物跡の方向が真北線から大きくふれ、推定外郭線、及びこれまで発見された建物跡と方向を異にしていることから、建物配置に大別して2つの時期があることが考えられるに至った。

2. 発見遺構

(1) 第1次調査区

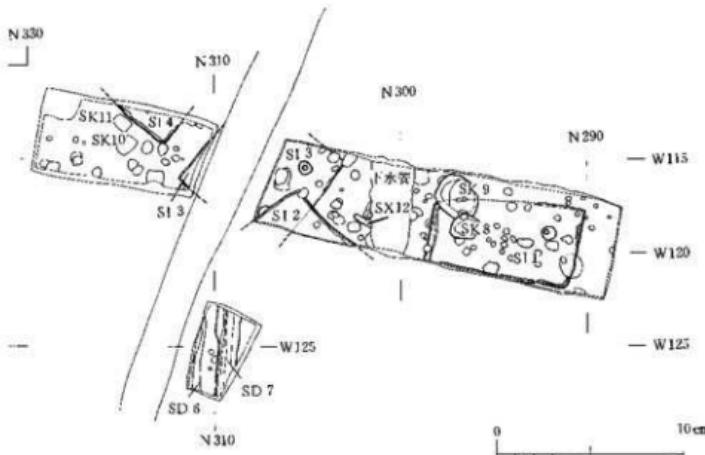
発見された遺構は掘立柱建物跡1棟、柱列1列、竪穴住居跡4軒、土壙4基、焼上遺構1基、溝跡2条であるが、外郭の区画施設と断定しうる遺構は発見されなかった。

S I 1 住居跡 北北長8m、東西長4.4mのやや歪んだ方法プランで、上部削平のため壁は殆んど残っておらず、北壁・西壁際で削溝の一部を検出した。床面は貼床であるが、南半部のみ残存。長軸線は真北方向である。堆積土は暗褐色シルト質粘土である。柱穴は2つ検出した。S K 8・9 土壙に切られている。

S I 2 住居跡 北東コーナー部のみ検出され、全形、規模は不明である。壁高は15cm、壁際には幅・深さ5m程の溝がめぐり、板材を立て並べていたことが考えられる。掘り方埋土を叩いて床面としている。堆積土は暗褐色・灰黃褐色シルト質粘土である。S I 3 住居跡を切っている。

S I 3 住居跡 北・南コーナーを検出したのみであるが、6.5×6.4m程の方形プランと考えられる。S I 2 住居跡と同様、壁際には幅5m程の溝がめぐる。南北中心線はN-31°-Eである。堆積土は暗褐色・黄褐色粘土質シルトである。柱穴は2つ検出され、壁から1.5mはなれ、柱間寸法は3.3mである。

S I 4 住居跡 南西コーナー部を検出したのみで全形、規模は不明、壁は削平され、貼床面

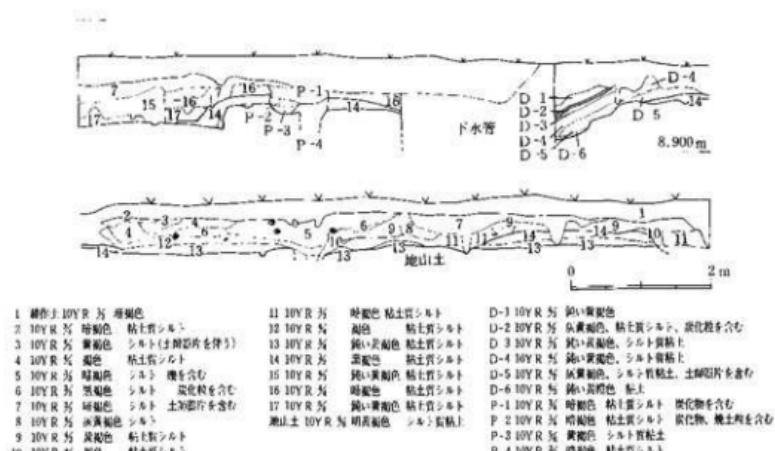


第3図 第1次調査遺構全体図

の一部と同溝が残存していた。方向は S I 3 住居跡と同方向に並んでいる。床面上に固く焼きしまった焼上面が一部検出され、上面より土器類・須恵器の蓋が出土している。

S B 63建物跡 東西3間以上(柱間寸法150~180cm)、南北2間以上(柱間寸法150cm)、方向はN-31°-Eである。柱穴は30~50cm程の円形で深さ10~30cm、柱痕跡は不明である。

S B 64柱列跡 3間以上(柱間寸法130~200cm)、方向はN-28°-Eである。柱穴は40~70



第4図 第1次南調査区 東壁セクション図

cm程の不整円形で、深さ15~30cm、柱痕跡は直径15~20cmである。

S D 6溝跡 幅1.0~1.3m、深さ40cm程で、真東西方向に延びている。北側壁はわずかに段がつぐく、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色・黒褐色シルト質粘土である。

S X 12焼土遺構 幅30cm、残存長1.1m・深さ30~60cmで底面は南に傾斜している。南側は掘乱溝により切斷され、全形・規模は不明。壁はほぼ直立し、断面はU字形を呈す。堆積土は暗褐色粘土で、下層に焼土・炭化物を多量に含み、底面・壁面は焼きしまっている。

この他に S D 7溝跡、S K 8~11土壙が検出されている。

(2) 第2次調査区

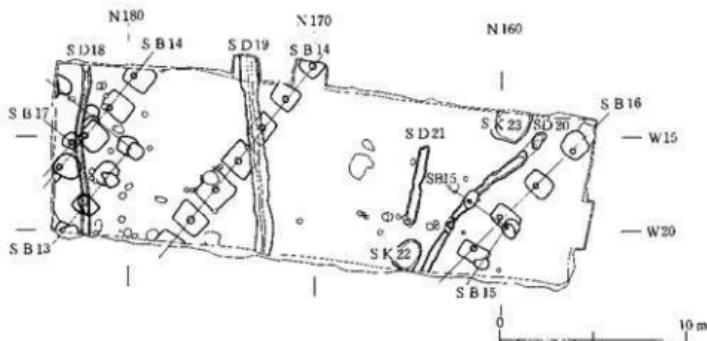
発見された遺構は掘立柱建物跡5棟、溝跡4条、土壙2基である。

S B 13建物跡 東西3間以上（柱間寸法180cm）、南北2間以上（柱間寸法推定210cm）で、方向はN-32°-Eである。柱穴掘り方は一辺1.0~1.3m。不整方形で、全てに抜き取り穴を作り、S B 14、17建物跡、S D 18溝跡に切られている。

S B 14建物跡 東西棟建物の南北両桁のみ検出し、梁部分は不明である。桁行8間以上（柱間寸法平均210cm）、梁行総長720cmで柱間は3間（柱間寸法240cm等間）とも4間（柱間寸法180cm等間）とも考えられ、方向はE-32°-Sである。柱穴掘り方は一辺130~170cmの方形で、柱痕跡は平均直径30cmである。深さ30cm前後しか残っておらず、埋土は暗褐色粘土質シルト及び黄褐色シルト質粘土である。S 13・17建物跡を切り、S D 18・19溝跡に切られている。

S B 15建物跡 東西・南北とも1間（柱間寸法240cm）のみ検出し、方向はN-29°-Eである。柱穴掘り方は一辺60~100cmの不整方形で柱痕跡はSD 20溝跡を切っている。

S B 16建物跡 東西3間以上（柱間寸法210cm）、方向はE-39°-Sである。柱穴掘り方は110×150cm程の隅丸長方形・不整方形で、柱痕跡は直径20~28cmである。S B 15建物跡に切ら



第5図 第2次調査区 平面図

れている。

S B17建物跡 柱穴を2つ検出したのみで詳細は不明である。S B14建物跡、SD18溝跡に切られている。

この他にSD18~21溝跡、SK22・23上塙が検出されている。

3. 出土遺物

(1) 第1次調査区

1次調査での出土遺物は、土師器、須恵器、瓦などである。土師器、須恵器は大半が小破片で、復元可能なものは少數である。瓦は、西トレンチ表土中より出土の桶巻き作り平瓦片1点のみである。以下遺構に関連のある遺物について略述する。

S I 1 西南隅の遺構検出面上で、土師器壺（第6図1）と須恵器大壺の体部片2点を出土している。土師器壺は、やや丸味を帯びた底部で、内外面とも全面ヘラミガキが施されている。体部下端では、細いヘラケズリによる調整がなされている。また、内外面とも黒色処理されている。住居跡内からは、北側と西側周溝より土師器片を数点出土している。床面からは、須恵器壺あるいは須恵器壺の口縁片と、須恵器壺（第6図8）が出上している。壺は、丸底風の底部で、切り離し技法は不明である。内外面ともロクロナデが見られる。

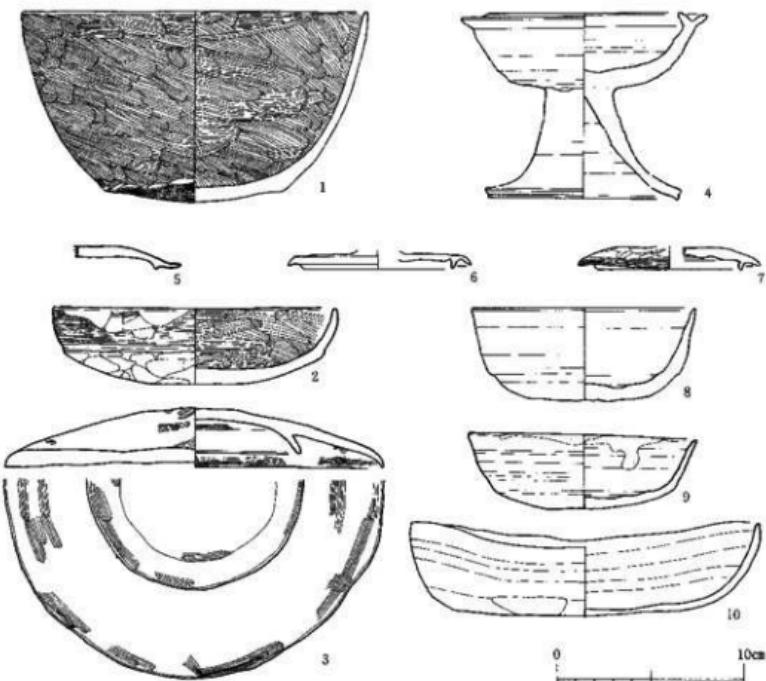
S I 3 床面上より火熱を受けたとみられる方形加工の石片が1点出土している。

SK11 土師器壺口縁部片、須恵器長頸壺口縁部片と須恵器壺口縁部片、さらに須恵器壺（第6図10）を出土している。壺は、底部が平底で、全体にゆがみがある。底部は回転ヘラケズリを受け、切り離し技法は不明である。内外面ともロクロナデが見られる。

65ピット S I 1住居跡西側周溝に切られるピットで、土師器壺（第6図2）を出土している。これはIIa類に属し、外面は丸底の底部から、体部中位に段を有し、やや内溝気味に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ、段から口縁まではヨコナデのち一部ヘラケズリを施している。内面は底部に一方向ののち、体部に横方向のヘラミガキが施され、黒色処理されている。

その他、SK9、SK10、SX12からも、土師器、須恵器の細片を出土している。

その他遺構に伴わない遺物について記載する。北トレンチの2層中より土師器壺と須恵器壺（第6図9）を出土している。須恵器壺はほぼ完形で、丸底の底部は仕上げのナデが施されている。切り離し技法は不明である。II縁部から体部にかけて、内外面とも樹脂状付着物が見られる。S I 4住居跡焼土上面より、土師器壺（第6図3）が出土している。周縁はわずかに屈曲し、内面に周帶を張り付けている。外面はヘラケズリをしたのち、ヘラミガキが施され、内面もヘラミガキが施されている。S I 1住居跡南側の遺構検出面上では、須恵器有蓋高壺（第6図4）を出土している。壺部と脚部の間に接合痕が見られ、口縁部には蓋受け部がある。内外面ともロクロナデが観察される。さらに1次調査区からは、内面に障壁のある、いわゆるカ



番号	写真	遺構・時代	種類	当機	特徴
1	28-4	S 1 1 住居跡焼出面	土師器	塊	内外面ハラミガキ、一部外面ハラケズリ、内外面黒色處理
2	28-3	65 pit	土師器	块	外画面接ちハラケズリ、ヨコナギ、内面ハラミガキ、内面黒色處理
3	28-1	S 1 4 住居跡	土師器	蓋	外底手持ちハラケズリ、ハラミガキ、内面ハラミガキ
4	28-2	南トレンチ遺構焼出面	須恵器	有蓋高杯	内外面ロクロナダ
5	北トレンチ 3 番	須恵器	蓋		
6	南トレンチ 2 番	須恵器	蓋		
7	北トレンチ遺構焼出面	須恵器	蓋		外底手持ちハラケズリ、横ナギ、内面ロクロナダ
8	28-6	S 1 1 住居跡床面	須恵器	块	内外面ロクロナダ
9	28-7	北トレンチ 2 番	須恵器	块	底面ナダ、外面ロクロナダ、樹脂状付着物あり
10	28-2	S K 1: 土 壁	須恵器	块	底部向転ハラケズリ、外面ロクロナダ

第6図 第1次調査区 出土遺物

エリのある須恵器蓋（第6図5、6、7）が数点出土している。

(2) 第2次調査区

2次調査区内では、土師器、須恵器、瓦片が若干出土したのみである。器形の知り得るものは、S B14建物跡の北1東3柱穴柱痕跡より出土した、土師器蓋片のみである。また、南1東2柱穴柱痕跡より土師器、須恵器片を若干出土している。

4. ま と め

推定方三町北辺部の調査ではやや小規模な柱穴をもつ掘立柱建物跡も数棟発見されているが、主体を占める遺構は竪穴住居跡である。

竪穴住居跡は削平を受けたことや、広い調査区が設定できなかつたことなどから、十分な調査が行なえなかつたが、出土遺物などからみて、南辺櫛木列や大溝などの遺構とほぼ同時期の7世紀後半から8世紀前半の遺構と考えられ、方四町とみられる外郭区画の内側に位置し、一般集落遺跡の竪穴住居跡とはやや異つた性格の竪穴遺構と考えられる。

その他には、ほぼ真東西方向に延びる溝跡があり、外郭南辺から北に三町の部分にあたるが、既設道路などに制約され、調査区の拡張ができなかつたため、広範囲な調査ができなかつた。しかし、外郭の区画施設とするにはあまりに規模が小さく、また、南辺長が四町になるものと考えられることから、北辺と断定するに至らなかつた。

第2次調査区の推定中央部で発見された掘立柱建物跡は柱穴掘り方の大きさが一辺1.7mにも及ぶ大形のもので、この規模の柱穴は多賀城跡（註6）、桃生城跡（註7）などに見られる。この建物跡は全容を知り得なかつたが、桁行8間以上になるものであり、梁行は間数が不明であるが、総長が720cmで、2間・3間・4間の可能性が考えられる。柱痕跡も直径30cm程度でかなり大きな建物であったことが考えられ、これと柱列方向を揃える建物が重複して発見されていることから官衙風建物群がこの地区にあり、柱穴の重複関係から三時期に及ぶ建て替えがあつたことがわかる。また、これらの建物跡は方向が、真北線から30°前後東へ偏しており、前年度の調査で発見された真北方向を基準とする建物群や外郭線の方向と大きな違いがあり、建物配置において、真北線を基準にしている時期と真北方向から30°程偏した線を基準にしている時期の二時期にわたる大きな改変が行なわれたことが考えられる。

VI 第3・5・6次発掘調査

1. 第3次発掘調査

(1) 調査経過

郡山三丁目19-1、赤井沢久治氏宅の西側畠地の地中に広い範囲で石敷が存在しているという話を地権者から聞き、ポーリング探査の結果、その存在を確認したので、 $5 \times 14\text{m}$ のトレンチを南北に設定した。表土（耕作土）を約20cm掘り下げたところ、第2層（黒褐色シルト）上面で石敷を検出した。石敷は調査区内で北端を確認したものの、南側は溝、ピット等に切られ確認できず、東西両方とも調査区外にのびていた。トレンチの南北両端を東および西に幅2~3m、長さ3~8mにわたり、3ヶ所で拡張したところ、西側ではトレンチ西壁から3m程で石敷西端を検出した。東側は、住宅との境界際まで拡張したが、さらに東に伸びている。

石敷の範囲の平面図を作製した後、石敷を撤去し、第2層を掘り下げた結果、第3層（黄褐色砂質シルト）上面で掘立柱穴、ピット等の遺構をいくつか検出したが、建物跡として全容を知るに至らなかった。また、一部において第4層（黒褐色シルト）を掘り下げ、第2次調査区で建物跡を検出した第5層（黄褐色粘質シルト）上面を精査したが、遺構は検出されなかつた。

また、この調査区の南側で郡山三丁目19-1赤井沢久治氏より郡山三丁目127-3において住宅新築のため、昭和55年10月発掘届が提出されたので、敷地内の遺構確認調査を実施した。調査区は第3次調査南区とし、 $2.5 \times 5\text{m}$ のトレンチを設定した。このトレンチでは擾乱が激しく黄褐色土地山上面で土壙2基、溝2条を検出し、これらの遺構に切られる掘立柱建物跡1棟の柱穴4つを検出したにとどまった。

(2) 発見遺構・出土遺物

S X24石敷遺構は南北12m、東西11m以上にわたり、2層上面で検出された。河原石を人為的に施設したことは明らかだが、半径以下の大石で、概観すると径2~5cmの小さいもので砂利石に近いものである。また、この遺構の下層より近世の陶器片や水差通宝が出土することから古代の遺構とは考えられない。

S K26・27土壙は円形・不整円形で深さ10~15cmであるが、いずれも全容を知り得ない。堆積土中より土師器・須恵器細片がわずかに出土したのみである。

S B25掘立柱建物跡は土壙・溝に切られ、遺存状況は極めて悪いが、不整方形の柱穴掘り方を有し、柱痕跡は15cm内外の円形、柱間は東西2間以上で、280m等間、南北方向は1間以上で寸法不明、東西柱列方向はE-3°-Sである。

2. 第5次発掘調査

(1) 調査経過

都山三丁目19-21庄子勇氏より都山三丁目121-1・2において倉庫新築のため、昭和55年9月発掘届が提出されたので、敷地内の遺構確認調査を実施した。2×7mのトレーナーを設定し、掘り下げを行い、6層目で地山の黄褐色シルト質粘土を検出し、この上面で溝を1条検出したのみである。

(2) 発見遺構・出土遺物

S D48溝跡はトレーナーの北壁際に沿って検出され、ほぼ東西方向に伸び、幅60~70cm、深さ20cm程である。

出土遺物はS D48溝跡検出面で寛永通宝1枚、S D48溝跡内より丸底の土師器壺片や格子目叩きのある平瓦片にまじり近世以降の瓦もみられることから、S D48溝跡も近世以降の溝跡と考えられる。

3. 第6次発掘調査

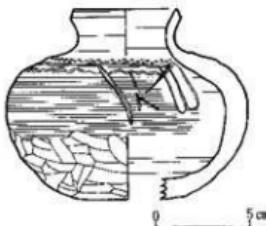
(1) 調査経過

都山二丁目10-5佐々木利夫氏により都山三丁目108-3において住宅新築のため発掘届が提出されたので、敷地内の遺構確認調査を実施した。調査区は4×2.5mのトレーナーを2つ並列して設定した。1・2層は耕作による搅乱土で、3層上面で溝1条と若干のビットを検出した。さらに4層（黄褐色粘質シルト地山）上面で、豎穴住居跡の一辺を検出した。

(2) 発見遺構・出土遺物

南トレーナーで3層上面より、直徑30cm前後、深さ10~20cmのビットを17検出したが、出土遺物もなく、時期・性格不明である。同じく南トレーナーで3層上面より幅40cm、深さ20cm程で東西方向にのびるS D49溝跡を1条検出したが、これも出土遺物がなく、詳細は不明である。

南トレーナー4層上面でS I 50豎穴住居跡の一辺を検出したが、北トレーナー全体が住居内に位置し、全体の形状・規模を明らかにできなかった。検出面から床面までの深さは20~25cmで、床面は貼床で、床面上には骨片を含む焼土や木炭のブロックが広がっていた。壁際には幅15cm、深さ10cm程の周溝が検出された。堆積土中および床面上からは土師器・須恵器の細片が若干、また床面上から須恵器壺（第7図）の半欠品が1点出土した。



第7図 第6次調査区
S I 50住居跡出土須恵器

VII 第4・7・8・9次発掘調査

1. 調査経過

第4次調査は推定方三町の南西コーナーにあたる地区で、南北に通る既設道路の両側に3×10mの西・南トレンチ、及び、一段高い水田に5×15mの北トレンチを1本設定した。西・南トレンチでは耕作土直下に黄褐色土の地山面を検出し、北トレンチでも深さ40cmの3層目で地山面を検出した。この段階で推定南辺位置に大溝を検出し、大溝と方向を異にする掘立柱建物跡なども検出した。大溝が西に延びていくことから、これを追いかける形で順次西側に2×5m程の補助トレンチを4本設定した。また、西トレンチの北端で材木が列状に検出された為、西トレンチを水田一枚分約400m²にわたって拡張したところ、大溝の北側に平行して東西に延びる柵木列が検出された。さらに北トレンチの北東部にも2×14mのAトレンチ、5×6mのBトレンチを設定し、ここでも柵木列および上塙等の遺構を検出した。

のことから、遺跡の南西コーナーはこの地区ではなく、さらに西側に位置することが明らかになった。また、外郭線と方向を異にする掘立柱建物等の遺構の存在も確認された。

第7次調査区は第4次調査区で検出した南側外郭線の西延長部にあたり、当初考えられていた推定方三町南西コーナーからさらに西に一町延びた地点で、柵木列・大溝の延長部に2×5mのトレンチを3本設定したが、最終的には拡張して約130m²の調査を行った。現況は水田であり遺構は耕作土直下の2層上面で検出された。真東西方向に延びていた大溝は直角に屈曲して北に延び、柵木列の延長部では、柱材が良好に遺存する掘立柱建物跡が1棟検出された。さらに2月に行なわれた第7次補足調査で、この建物跡の北側に取りついで延びていく西辺柵木列が検出され、外郭西辺の区画施設も南辺と同様のものであったことが明らかになった。

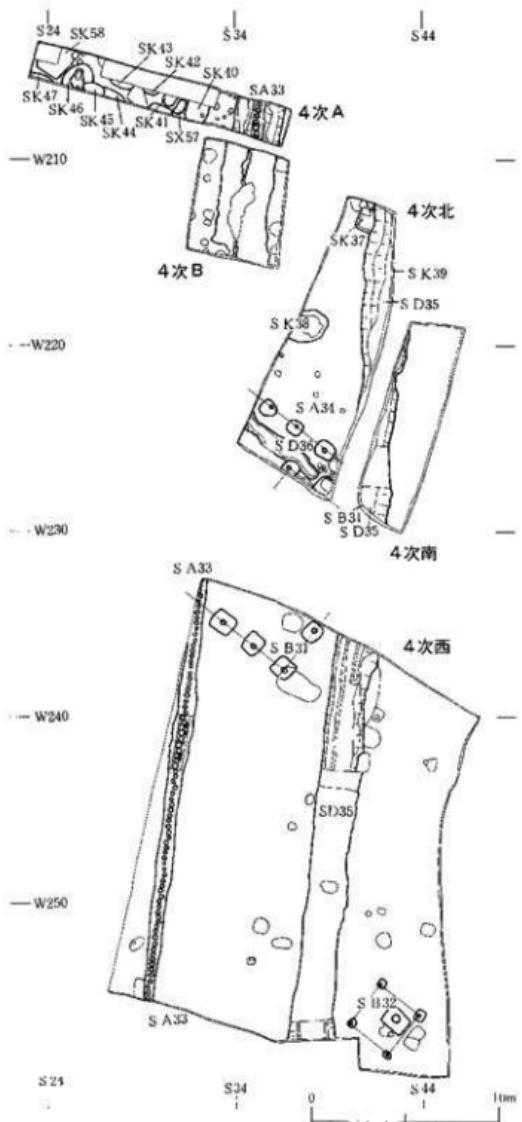
第8次・第9次調査は外郭南辺の遺構確認調査で、第8次調査区は南西コーナー建物跡から東へ315mの地点、第9次調査区は同じく240mの地点にあたり、両地区とも現況は水田であり、3層（黄褐色土地山）上面で大溝と柵木列が第4次調査とほぼ同様の状況で検出された。

2. 発見遺構

(1) 第4次調査区

発見された遺構は掘立柱建物跡2棟、柵木列、柱列1列、溝跡2条、上塙12基、焼上遺構1基で、外郭南辺の区画施設が大溝と柵木列であることが明らかになった。

S B31建物跡 南北3間（柱間寸法210cm等間）、東西3間（柱間寸法270cm）の東西棟建物跡と考えられるが、既設道路に分断されているため、全容は不明である。方向はN-31°-Eである。柱穴掘り方は一辺100~120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径20~25cmで、深さは20cm程しか残っていない。直接の重複関係はないが、S A33柵木列・S D35溝跡に切られるものと考え



第8図 第4次調査区 平面図

られる。

S B32建物跡 1間×1

間（柱間寸法260cm等間）

の方形建物跡で、方向はN

— —31°—Eである。建物内

部にやや南に片寄って大形

の柱穴が1つある。四隅の

柱穴掘り方は一辺40~60cm

の不整形方形で、柱痕跡は直

径15cm前後である。中央柱

穴掘り方は110×130cmの隅

九長方形で、痕跡は直径40

cmで、深さは60cmである。

S A33櫛木列 真東西方

向に丸材を並べた櫛木列で、

櫛木の平均直径25cm、心心

間隔は平均29cmで、ほぼ密

接している。櫛木は木材の

芯材で、表面を手斧でハツ

リ、ていねいに面取りして

太さをほぼ揃えている。ま

た一部で不等沈下を防ぐた

めの礎板を櫛木の下に入れ

ている。掘り方は幅250cm

の広掘りで、深さ80~100cm

程でゆるい段をつけ、さら

に幅90cm、深さ90cm程の壁

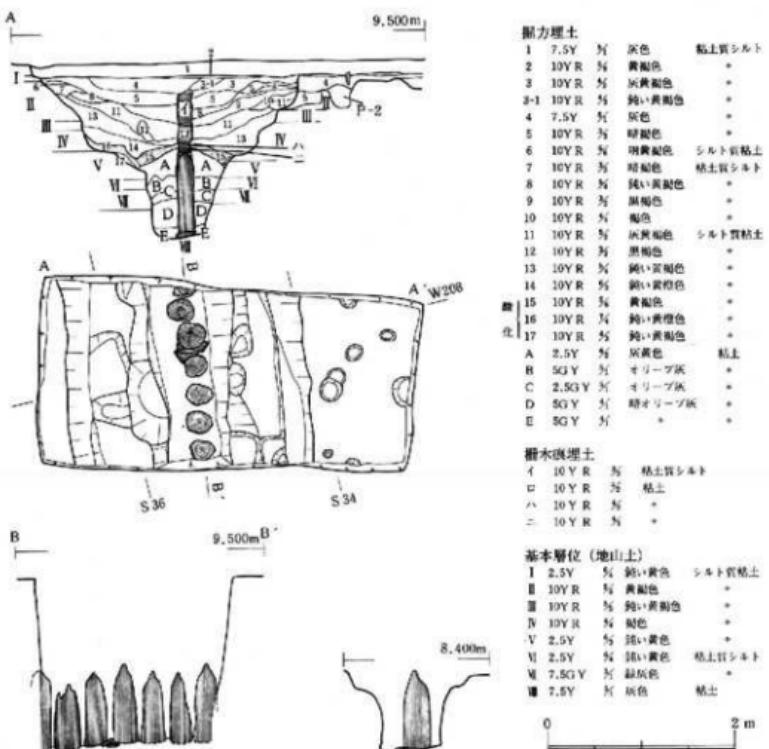
面が直立する下段掘り方が

あり、検出面から最深部ま

での深さは約180mを計る。

櫛木は基底より各々100~

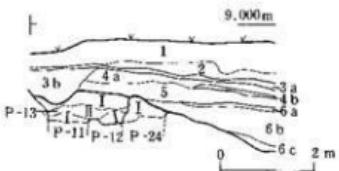
110cm程遺存しているが、検



第9図 第4次A調査区 SA 33平面図・掘り方断面図

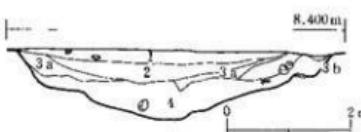
出上面、土層断面の観察により、少なくとも造構検出面より上に頭を出していたものと判断される。低段位の調査区では掘り方上部が削平され、幅50~90cm、深さ100~110cmの掘り方下段部のみが残存していたが、柵木の遺存状態は良好で耕作土直下の造構検出面（黄褐色土地山上）で柵木上端が見えるものもある。この低段位調査区では長さ22.5mにわたり、78本の柵木を検出した。掘り方埋土は上段部が灰黄褐色・暗褐色粘土質シルトがブロック状に混合したもので、柵木の遺存良好な下段部は灰黄褐色・褐灰色・オリーブ灰色等の粘土でグライ化が著しい。

SA 34柱列 2間以上（柱間寸法170~190cm）で方向はN-31°-Eである。柱穴掘り方は一辺60~110cmの隅丸方形もしくは精円形で、柱痕跡は直径15~20cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。西側に隣接してSD 36溝跡が平行している。



- 1 10YR 5% にほい黄褐色 シルト [堆積土] 6 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト
2 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト P-13
3a 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト 地山土
3b 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト
4a 10YR 5% 浅黃褐色 粘土質シルト P-11
4b 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト
5 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト P-12
SDS層上 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト P-21
6a 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト
6b 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト

第10図 第4次北調査区 東壁セクション図



- 1 10YR 5% 黄褐色 粘土質シルト
2 10YR 5% 黄褐色 シルト
3a 10YR 5% 黄褐色 シルト
3b 10YR 5% にほい黄褐色 シルト
4 10YR 5% 黄褐色 シルト 小石を含む

第11図 第4次調査区 SD 35溝跡セクション図

S D 35溝跡 幅250~300cm、深さ60cm程であるが、上部1m程は削平されている。横断形は扁平逆台形である。方向は S A 33柵木列と同方向の真東西線に一致し、溝中心線から柵木列中心線まで880~900cmである。堆積土は大別して2層に分けられ、上層はグラ化した褐灰色粘土質シルト、下層は上層の土と地山土（黄褐色シルト質粘土）がブロック状に混合したもので、この地区では溝に水を貯めた形跡が認め難い。また、溝跡検出面のさらに一層上面に厚さ3cm程の灰白色火山灰層の堆積が見られる。

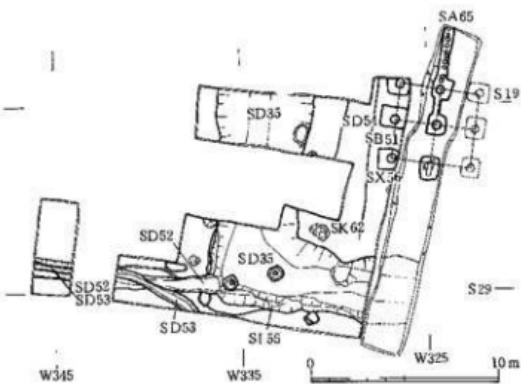
S D 36溝跡 幅70~100m、深さ15cm程で横断形は浅いV字形である。方向は S A 34柱列と同じN-31°Eで溝中心から柱列まで120~130cm、南端は柱列南柱穴位置に対応している。

この他 S A 33柵木列の北側には柵木列掘り方が検出された2層の下、3層上面で、SK 40~47・49土壤、S X 57焼土遺構が密接して検出され、住居跡と考えられる粘床の一部や焼土面も検出されたが、いつれも詳細は不明である。

(2) 第7次調査区

発見された遺構は掘立柱建物跡1棟、柵木列、溝跡7条、住居跡1棟、土壤1基、整地層で、外郭南西コーナーと断定しうる外郭大溝の屈曲部と柵木列の隅部につく建物跡の存在が明らかになった他、西辺の外郭区画施設も一部検出された。

S B 51建物跡 2間×2間（柱間寸法210m等間）の総柱方形建物跡と考えられ、方向は真北線に合致している。柱穴掘り方は一辺100~130cmのやや歪んだ方形で、深さ180m前後である。柱が良好に遺存しており、木材の芯材を用いた直径45~50cmの丸柱で、表面は手斧でハツリ、幅7~9cmで上から下へ面取りした痕跡が明瞭である。中央柱の底面観察によれば、柱材の樹令は120年前後である。柱穴埋土は褐灰色、灰褐色、綠灰色の粘土およびシルト質粘土で、グラ化が著しい。また、S A 65西辺柵木列の掘り方は北列中央柱穴から中央柱穴まで延びており、両者の埋土に差異が認められず、建物と柵木列が同時に構築されたことがわかる。S A 65西辺



第12図 第7次調査区 平面図

柵木列は北列中央柱に密着して北に延びており、

S A33南辺柵木列も延長線が建物の東西中心線

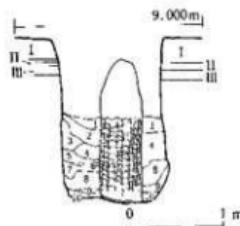
に一致することから接続部は同様と考えられる。

S X56整地層を切っている。

S D35溝跡 S A33南辺柵木列と平行して延びていた S D35溝跡は外郭南西コーナー部で、

S B51建物跡をとり囲む様に直角に屈曲して北に延びている。この部分では幅400~500cm、深さ60~70cmで、溝中心線からS B51建物跡の中央柱までの間隔は南辺側・西辺側とも900cmである。南辺部屈曲点付近の堆積土上層より土師器・須恵器が集中して出土している。S I55住居跡、S X56整地層を切って掘り込んでいる。

S D52溝跡 幅100cm、深さ30~35cmで横断形は逆台形である。S D35溝跡の屈曲部からさらに西に延びている溝跡で、S D35溝跡との底面落差は40cm程あるが、両者の堆積土に差異は認められず、同時期のものと考えられる。S I55住居跡を切り、S D53溝跡に切られている。



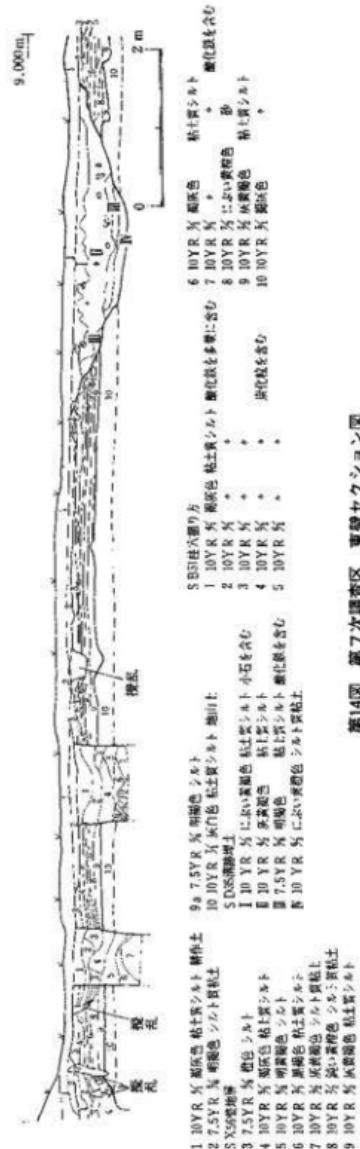
西1南2 挿立柱穴堆土			
1	7.5GY	分	暗緑灰色
2	10 Y	分	*
3	10 Y	分	灰色
4	7.5Y	分	*
5	2.5GY	分	オリーブ灰色
6	7.5Y	分	灰色
7	7.5GY	分	緑灰色
8	10 GY	分	*
9	10 GY	分	暗緑灰色
10	10 GY	分	*

地 層

I	10 YR	分	褐色
II	10 YR	分	にぶい黄褐色
III	10 YR	分	灰黄褐色

粘土質シルト
砂質シルト
砂質シルト

第13図 S B51建物跡・柱穴セクション図



S I 55住居跡 S D35溝跡屈曲部で切られ南西コーナー部分と、柱穴底部が2つ検出されたのみで殆んど残っていない。

S X 56整地層 厚さ30cm前後で明黄褐色シルト質粘土、橙色シルト、黒褐色粘土質シルト等が3~5cm厚で5~8枚互層を成している。第7次調査区内の全域で検出され、全ての遺構がこれを切っている。

その他、S D53・54溝跡が検出された。

(3) 第8次調査区

S A 33柵木列 掘り方は検出面で幅150cmで掘り方ほぼ中央に柵木列痕跡が観察される。

S D 35溝跡 幅400cmである。

(4) 第9次調査区

S A 33柵木列 掘り方は検出面で幅150~170cmで、下段掘り方は北側に片寄り、幅90cmで壁はほぼ直立しており、深さ70cmで柵木上端部が検出される。

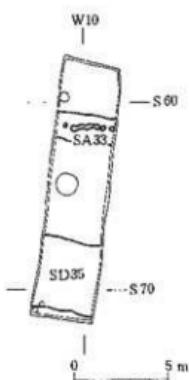
S D 35溝跡 幅400cm、深さ70cm程で、横断形は逆台形であるが、北壁は底面から40cmで、幅60cm程の段がつく。底面幅は160cmでほぼ平坦である。堆積土最上面に灰白色火山灰が薄く堆積している。

3. 出 土 遺 物

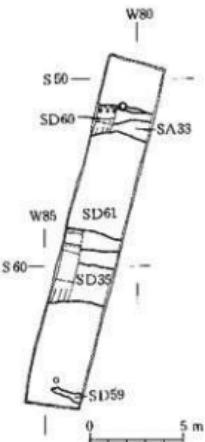
(1) 第4次調査区

第4次調査での出土遺物は、土師器、須恵器、瓦等で、大半は小破片で、復元可能なものは極少量である。特に北トレンチ遺構検出面、Aトレンチの各土壤、ピットからの出土が多い。以下、遺構に関連のある遺物について略述する。

S D 35溝跡 堆積土から土師器壺・甕・須恵器壺・甕を出土しているが、復元可能なものは



第15図 第8次調査区
平面図



第16図 第9次調査区
平面図

2点で、堆積土2層中出土の土師器坏、須恵器壺である。土師器坏（第17図2）は、Ⅱb類に属し丸底で体部外面に段を有し、体部下半から底部に手持ちヘラケズリ、体部上半にヨコナデを施し、内面も段を有し、底部にヘラミガキを施している。須恵器壺（第17図6）は、底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリを施し、体部下端にも手持ちヘラケズリを施している。内面片側には漆と考えられる樹脂状の付着物がみられる。

S A33柵木列 土師器細片が若干出土したのみであるが、観察によればクロロ使用痕は認められない。

S B31建物跡 西1南2柱穴掘り方、埋土上より頸部に波状沈線が巡る須恵器壺の頸部片が出土している。

Aトレンチ内S K47土壤出土の土師器坏（第17図1）、SK46土壤No2ピット出土の土師器坏（第17図3）はⅡb類に属し、両方とも丸底で、体部外面に段を有し、底部から体部にかけて手持ちヘラケズリ、体部上半にはヨコナデを施し、内面は底部に一方のち体部に横方向のヘラミガキを施し、黒色処理を行っている。SK46土壤No2ピット出土の土師器底面には「名取」のヘラ書き文字がある。

その他、北トレンチの遺構検出面で須恵器壺（第17図5）の破片が1点出土している。外面頸部に手持ちヘラケズリが施され、口唇部内面には、カエリがある。

Aトレンチ2層中より土師器高坏（第17図4）はⅢd類に属し、環部外面はナデ、内面ヘラミガキを施し脚部は直立する筒状部から「八」の字状に開き筒状部外はヘラケズリ、標部でナデを施している。又、各土壤の堆積土から土師器、須恵器片とともに、丸瓦、平瓦、模斗瓦等の小破片が10数点みられる。

(2) 第7次調査区

第7次調査での出土遺物は、土師船、須恵器、瓦等で、特にSD35溝跡から多量の土師器高坏、須恵器坏等を出土しているが、SD52・53溝跡からも比較的多くの遺物を出土している。以下造構に閃連のある遺物について略述する。SD35溝跡1層、3層中の出土が豊富で、土師器坏・高坏・甕・壺、須恵器坏・高坏・甕・壺・瓦などがある。1層中出土の土師器坏は、全てが丸底であるが、器形、調整から次のように分類される。

- I a類 底部から口縁部下端までゆるやかに湾曲し、口縁部で「く」字に内側に屈曲するもの。底部から体部に手持ちヘラケズリ、口縁部にヨコナデ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ、内外面とも朱塗り。（第18図7）
- I b類 底部から口縁部までゆるやかに湾曲し、口縁部に沈線が一本めぐるもの。底部から口縁部まで全面手持ちヘラケズリ、内面はナデ、内外面とも朱塗り。（第18図8）
- II b類 体部下半に段を有し、内面にも軽い段を有するもの。底部から段まで手持ちヘラケズリ、段上部はヨコナデ、内面は全面ヘラミガキ、黒色処理。（第18図9）
- III類 底部から口縁部までゆるやかに湾曲するもの。底部外面から口縁部まで手持ちヘラケズリ、口縁部に一部ヨコナデ、内面は全面ヘラミガキ、黒色処理。（第18図10）
上師器高坏は10数点出土し、坏部と脚部とが接合して復元可能なものは僅かである。器形、調整から次のように分類される。
- I a類 坏部の体部外面にわずかに稜を有し脚部は低い筒状部から裾部が大きく開き、筒状部に3つの不整長円形透孔を有する。坏部外面手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理、脚部筒状部、裾部内外面とも手持ちヘラケズリ。（第18図19）
- I b類 坏部は不明で、脚部は直立し、筒状部に三角孔を2つ有する。坏部内面はヘラミガキ、黒色処理。裾部外面は手持ちヘラケズリ。
- T c類 坏部は不明で、脚部は高い筒からゆるやかに開き出し、裾部が大きく開き、筒状部に3つの長い方形透孔を有する。坏部内外面とも不明、脚部外面はヘラケズリ、内面はナデ、裾部外面ともヨコナデ。
- I d類 坏部は扁平で、脚部は大型で長円形の4つの透孔を有し筒状部は太く、裾部は屈曲して横に開く。坏部外面は刷毛目で、脚部接続部にヘラケズリを施し、内面はヘラミガキ、脚部外面はヘラケズリ、内面はナデ、裾部外面はヘラナデを施している。
- II a類 坏部は底部が平坦で、口縁部が斜めに立ち上がり浅い。脚部は低く短い筒状部から「八」の字状に開く。坏部外面は手持ちヘラケズリ、一部ヘラナデ、内面はヘラミガキ、黒色処理。脚部・裾部外面はヘラケズリ、内面はナデ。（第18図18）
- II b類 坏部は不明である。脚部は低く、短い筒状部から「ラッパ」状に大きく開く。坏部内面はヘラミガキ、黒色処理。脚部外面は手持ちヘラケズリ後ナデ、脚部内面はナデ。（第18図13）
- III a類 坏部は不明である。脚部は高く細い筒状部からゆるやかに開く。坏部の調整は不明であるが、黒色処理。脚部外面はヘラケズリ、内面はナデ、裾部内外面ともヨコナデ。
- III b類 坏部は不明である。脚部は高く、太い筒状部から小さく開き、筒状部下端に稜を有する。坏部内面は一方向のヘラミガキ、黒色処理。脚部外面はヘラケズリ、内面はヘ

ラナデ、裾部内外面はヨコナデ。（第18図15）

III c類 坯部は不明である。脚部はそれほど高くなく、筒状部から「ラッパ」状に大きく開く。坯部内面はヘラミガキ、脚部外面は手持ちヘラケズリ後ナデ、内面はナデ、裾部外面はナデ、一部ヘラケズリ。（第18図17）

須恵器环は、復元可能なものが6個体出土し、殆ど同形態である。底部から口縁部にかけ直立し、内外面とも体部から口縁部にかけてロクロ調整し、底部切り離しは、回転ヘラ切り後、回転ヘラケズリを施している。（第18図20、22、23、24）

須恵器高环は脚部だけで、脚部筒状部からゆるやかに開き裾部は歪みがある。脚部はロクロ調整が内外面に見られる。

須恵器甕（第18図25）は体部下半を欠損しており上半部のみである。頭部の外面は沈線に区画されその上下に3~4本の不規則な波状沈線文が2段に巡り、体部は外面が平行叩き目文、内面は青海波文が見られる。

2層中出土の土師器环（第18図11）は、I b類に属し丸底からゆるやかに湾曲し、口縁部で直立する。II線部外側に沈線が一本巡っている。底部から体部は手持ちヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は、全面ナデ、口縁部にわずかにヨコナデが施されている。内外面とも朱塗り。

3層中出土の上師器环（第18図12）は、I c類に属し丸底で底部から口縁部下端まで緩やかに湾曲し、口縁端部がわずかに外反し立ちあがる。底部からII線部下端まで手持ちヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ、II線部はヨコナデを施している。内面は朱塗り。また、土師器环（第18図14）は、II d類に属し丸底風平底で、底部から口縁部にかけて緩やかに立ちあがり外面は上半部ヨコナデ、下半部から底部をヘラケズリ後、全面ミガキを施し内面は全面ヘラミガキ、黒色処理を施している。

土師器高环（第18図16）は、I c類に属し环部は不明であるが、脚部は高い筒状部から緩やかに開き出し、裾部が大きく開き、筒状部に3つの長い隅丸長方形透孔を有する。环部内面は、ヘラミガキ、黒色処理され、脚部外面は磨滅が激しいので観察しがたいが、裾部内外にヨコナデ脚部内面はヘラナデを施している。

S D52溝跡から土師器、須恵器、瓦片が出土したが全て小破片で復元可能な固体はない。

S D53溝跡1層中出土の須恵器高台付环（第18図21）は、底部切り離し不明であるが、高台を貼り付けている。その他遺構外からも土師器、須恵器、瓦片など多数遺物が出土している。

(3) 第8・9次調査区

土師器、須恵器の小破片が若干出土しているが、復元可能な固体はなかった。

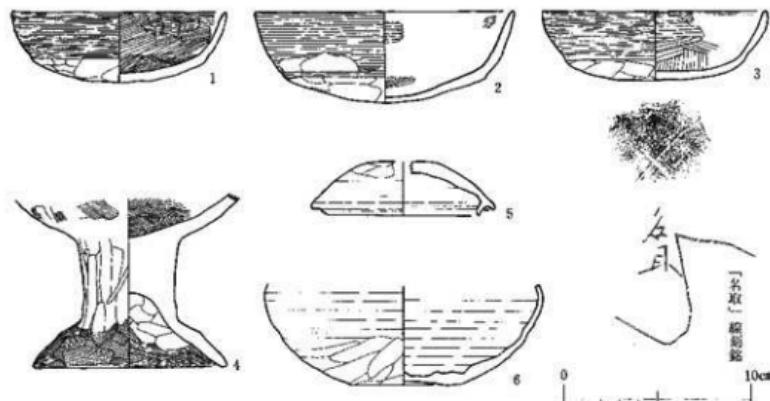
9次調査区 S D35溝跡堆積土中より、土師器环、甕、須恵器甕の小破片が出土している。

表5 第4、7次調査区土師器坏分類表

分類	部 形	調 整						実測面番号
		外 面		内 面		底 部	端 部	
		口 端 部	件 部 上 半	件 部 下 半	口 端 部	体 部		
I	a 口縁部く字に内側に凹曲							内付面赤塗り 第18回-7
	b 口縁部に沈窓	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	内付面赤塗り 第18回-8,11
	c 山根部膨がれぞかに外反し立る上がる							内正朱塗り 第18回-12
II	a 体部中位に段	ヨコナダ	ハラケズリ		ハラケズリ			第6回-2
	b 体部下半に段、内面にも段	ヨコナダ	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	第7回-3 第18回-9
	c 体部下端に段				ハラケズリ	ハラケズリ	ハラケズリ	黒 色 处 理 (内面)
	d 丸底削平位、体部中位に段	ヨコナダ	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	ハラケズリ	第18回-14
III	底盤から口縁まで赤るやかに内曲	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ヨコナダ	手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	黒 色 处 理 (内面) 第18回-10

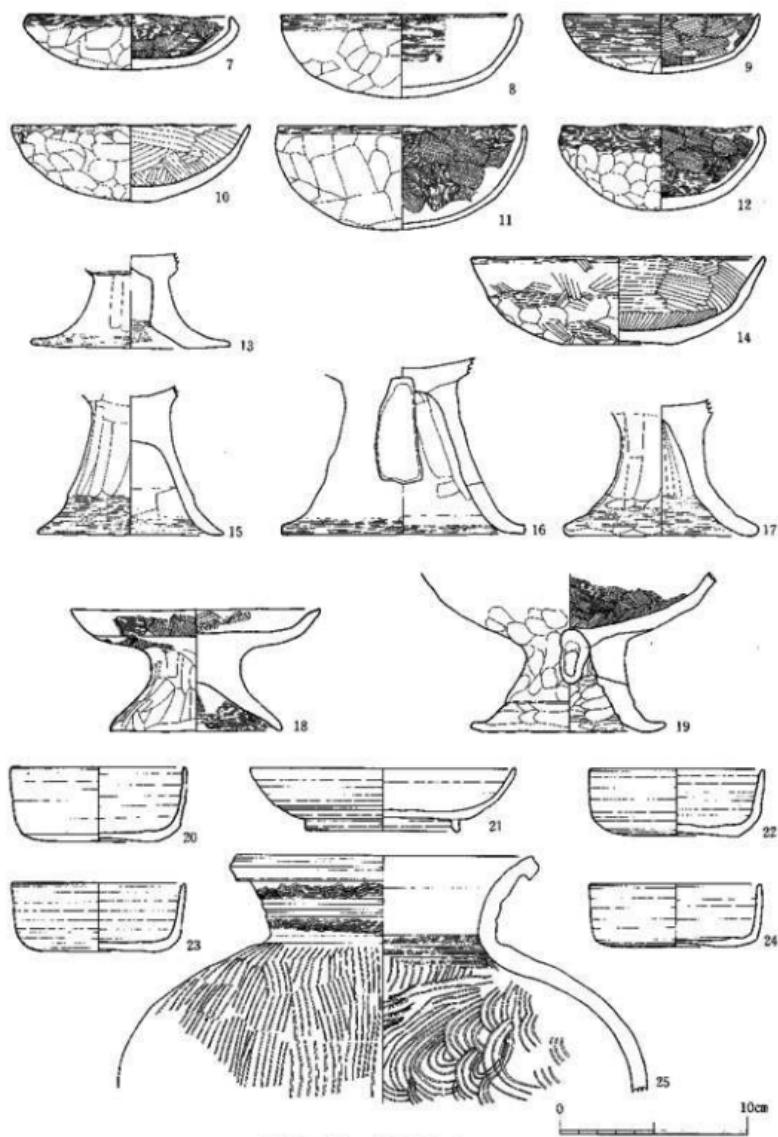
表6 第4、7次調査区土師器高坏分類表

分類	部 形	調 整						実測面番号	
		坏 高		御 部		脚 底 部			
		外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
I	a 当初部低く大きく突く、小孔3つ	手 槌 も ハラケズリ	ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	第18回-19				
	b 初伏部高く直立する、三孔れ3つ	手 槌 も ハラケズリ	ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ					
	c 第伏部高く、クリバ法は多く開く、方孔れ3つ			手 槌 も ハラケズリ			ヨコナダ		
II	a 大型で少い深状部、断面に凹曲に膨らむ、裏内形化4つ	ハラケズリ	ハラケズリ	ナ	ナ	ナ	ナ	第18回-18	
	b 狹く無い深状部、ナミ法に膨く	ハラミガキ	ハラミガキ	手 槌 も ハラケズリ	第18回-13				
	c 狹く無い深状部、ゆるやかに膨く			手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ヨコナダ	
III	a 狹く無い深状部、少く膨く			手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ヨコナダ	
	b 狹く無い深状部、少く膨く			手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	手 槌 も ハラケズリ	ヨコナダ	ヨコナダ	
	c 腹部からタッハ狀に開く	ハラミガキ	ハラミガキ	ナ	ナ	ナ	ヨコナダ	ヨコナダ	
d 直立の筒状部、「ハ」字状三脚く	ナ	ナ	ハラミガキ	手 槌 も ハラケズリ	第18回-4				



番号	写真	遺構層位	種類	形・様	特徴	
					外観	内面
1	29-1	4 次 S 灰	切土	井	底部手持ちへタケズリ、側部に鉄。ヨコナギ	ヘラシガキ、黑色地質
2		1次刀下シモ S D 2 灰	土壁	井	底部手持ちへタケズリ、側部に鉄。ヨコナギ	ヘラシガキ、黑色地質
3	30-10	4北北西シテナ S D 2 灰	1号	井	底部手持ちへタケズリ、側部に鉄。ヨコナギ、のべた縁	ヘラシガキ、黑色地質
4	29-2	4 次 S ドラフ 2 灰	土壁	井	底部手持ちへタケズリ、手筋もへタケズリ	側面カド。手筋もヘラシガキ、井幅へタケズリ、黑色地質
5		4北北西シテナ S D 2 灰	1号	井	底部手持ちへタケズリ	ヨコナギ、のべた縁
6	29-3	4 次刀下シテナ S D 2 灰	土壁	井	手筋へタケズリ、ヨコナギ	ヨコナギ、有孔貝貝殻
7	29-4	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	底部手持ちへタケズリ、上縁部はコナギ、朱墨り	ナナ、朱墨り
8	29-5	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、上縁部はコナギ	ナナ
9	29-6	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	底部手持ちへタケズリ、ヨコナギ、側面一段	ヘラシガキ、黑色地質
10	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、上縁部はコナギ	ヘラシガキ、黑色地質	
11	30-5	7 次 S D 35 2 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、上縁部コナギ、朱墨り	ナナ、朱墨り
12	30-8	7 次 S D 35 2 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、ヨコナギ、朱墨り	ナナ
13	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、ナナ	片端へタケズリ、黑色地質、鋼筋ナナ	
14	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、ヨコナギ、後ヒガキ	ヘラシガキ、黑色地質	
15	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、ヨコナギ	片端へタケズリ、黑色地質、鋼筋ナナ	
16	30-7	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋へタケズリ、ヨコナギ	片端へタケズリ、黑色地質、鋼筋ナナ
17	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋もへタケズリ、ヨコナギ	片端へタケズリ、鋼筋ナナ、ヨコナギ	
18	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋ナギ、底部手持ちへタケズリ	片端へタケズリ、黑色地質、鋼筋ナナ	
19	29-7	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	底部手持ちへタケズリ、鋼筋手筋もへタケズリ	片端へタケズリ、鋼筋手筋もへタケズリ
20	30-2	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	側面へタケズリ、底部手筋上縁部へタケズリ	
21	30-9	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	底部手持もへタケズリ縁、背引柱付近	
22	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	側面へタケズリ、底部、側面、底部下縁部へタケズリ		
23	30-3	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	側面へタケズリ、底筋、底部下縁部へタケズリ	
24	30-4	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	側面へタケズリ、底筋、底部下縁部へタケズリ	
25	30-6	7 次 S D 35 1 灰	土壁	井	手筋ナギ、底部下縁部2段	對物法

第17図 第4次調査区 出土遺物



第18図 第7次調査区 出土遺物

4. まとめ

遺跡の南側を区画する施設は幅3m以上の大溝とその内側に平行する柵木列で、推定外郭線の南辺位置と一致し、真東西方向に現段階では320mまで確認され、この南辺となる区画施設は当初考えられていた推定方三町の南西コーナーで曲がらず、さらに西に一町延びた地点で北に屈曲することから、南辺長は四町と考えられる。外郭線の規模は、南辺の検出状況などから、方四町と考えられる。

南辺柵木列は掘り方の幅が250cm、深さ180cmの一級布掘りで、掘り方基底の標高は7.3m程でほぼ一定しており、柵木残存部上端の標高も8.1m~8.3mで現地表面からの深さに関係なく一定である。柵木は材木芯材を加工して太さを揃え、密接して立て並べており、上部削平、擾乱を受けていない高段位水田の調査区では遺構検出面が旧表土に極めて近いと考えられるが、この調査区の遺構検出面では柵木痕が観察され、掘り方土層断面でも柵木上部に立ちあがる柵木痕跡が明瞭にみられ、柵木列が土中に埋設されたものではなく、少なからず地上に上部を出していたものと考えられる。また、掘り方埋土は版築状につき固められたものではないことも明らかである。

南辺西端部では外郭南辺大溝が北に屈曲し、柵木列の延長上には直径50cm程の大形の丸柱が遺存する建物跡が発見された。この建物跡は、東側が既設道路にかかり全容は明らかではないが、2間×2間の縦柱建物跡で外郭コーナーの隅櫓建物跡と考えられる。櫓建物跡の北側には建物柱に密接して西辺柵木列が真北方向に延びている。櫓建物跡と柵木列との北側接続部では建物柱と柵木が密接しており、掘り方は建物中央柱穴まで延びているが、柵木は存在しない。

尚、南辺柵木列と櫓建物跡との接続部は調査不可能であったが、ほぼ同様の状況と推定される。

柵木列と平行していた南辺大溝は外郭南西コーナーの櫓建物跡を囲むように「L」字状に屈曲して北に延び、外郭西辺の区画施設も南辺と同様で、柵木列と大溝中心線との間隔は平均900cmである。

出土した遺物の大半は外郭南辺大溝の南西コーナー屈曲部付近で、堆積土1層中が特に集中している。土師器壺によれば栗田式期から国分寺下層式期（註8）のものとみられ、外郭区画施設の年代もおおむね、7世紀後半から8世紀初頭頃と考えられる。また、南辺柵木列北側の、柵木列検出面向下層で発見された上横内ビット埋土より、底面に「名取」とヘラ書き縦刻文字の入った栗田式期の土師器壺が1点出土している。

これらのことから、これまで郡山遺跡として知られていた諏訪神社北側の瓦散分布地は推定方四町の区画外の南に位置し、ここにはほぼ同時期の建物群のある別区画と考えられる。

註

- 註1 山中 慢 「漆液を容れたる陶器」「考古学雑誌」第五卷第五號 1915. 1
- 註2 伊東信雄 「仙臺市内の古代遺跡」「仙台市史」第3卷別篇1 1950. 8
- 註3 註2と同
内藤政恒 「東北地方発見の重縫蓮花纹鏡瓦についての一考察」「寶英」第22冊
- 註4 註2と同
- 註5 仙台市教育委員会「3. 郡山遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」
1980. 3
- 註6 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」各年次年報
- 註7 宮城県多賀城跡調査研究所「桃生城跡Ⅰ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊 1975. 3
- 註8 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」14輯 東北史学会 1957
宮城県教育委員会「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調
査報告書」 1974. 3



図版1 郡山遭跡航空写真



図版2
1次調査区 南トレンチ全景



図版3
1次調査区 北トレンチ全景



図版4
1次調査区 西トレンチ全景

図版5 2次調査区 全景



図版6
2次調査区
S B14建物跡





図版7
2次調査区 S B 13・14・17建物跡



図版8
2次調査区 S B 13・14・17建物跡



図版9
S B 15・16建物跡柱穴断面



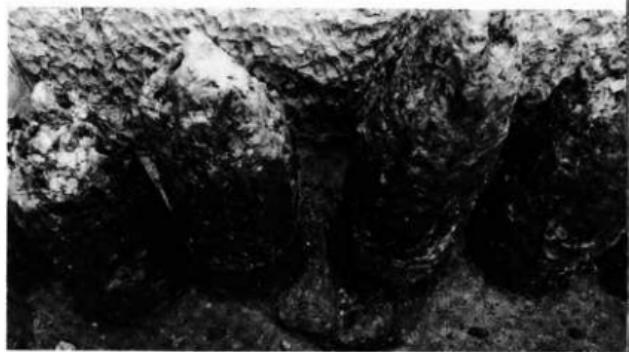
図版10
S B 13建物跡柱穴断面



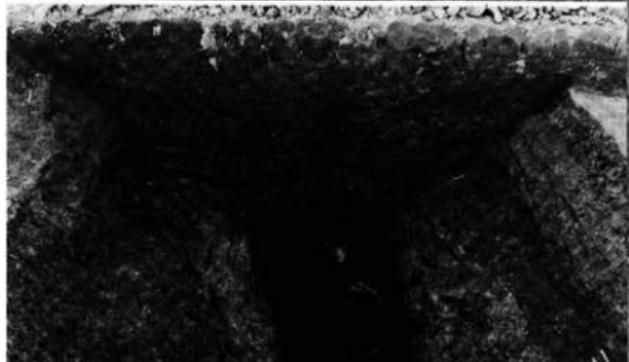
図版11 4次調査区 SD 35溝跡、SB 31建物跡



図版12 4次調査区 Aトレンチ SA 33櫛木列



図版13 4次調査区
Aトレンチ SA 33櫛木列



図版14 4次調査区
Aトレンチ SA 33櫛木列土層断面



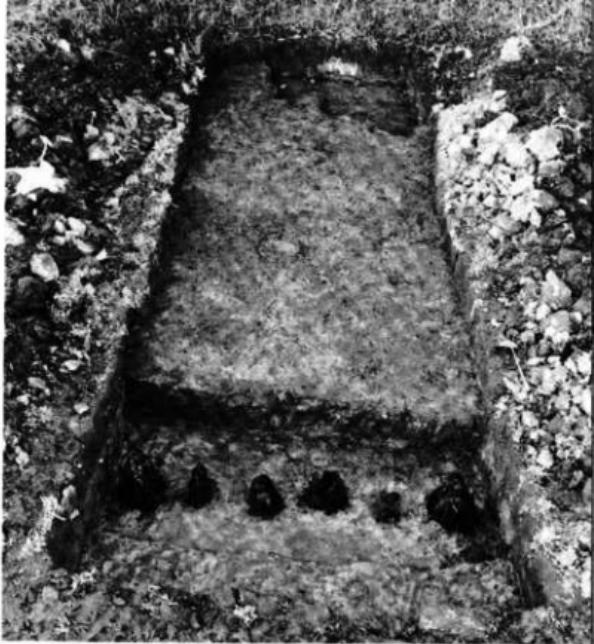
図版15 4次調査区
S A 33柵木列、S D 35溝跡検出面



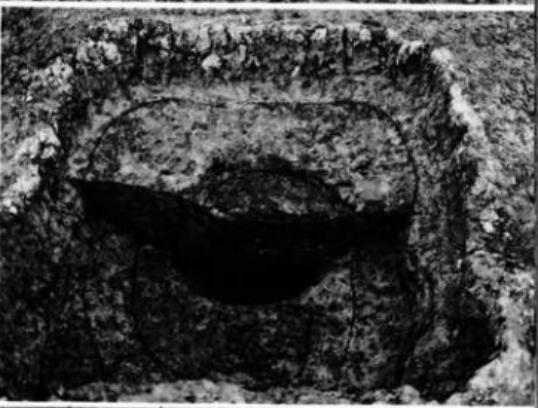
図版16 4次調査区
S A 33柵木列、S D 35溝跡



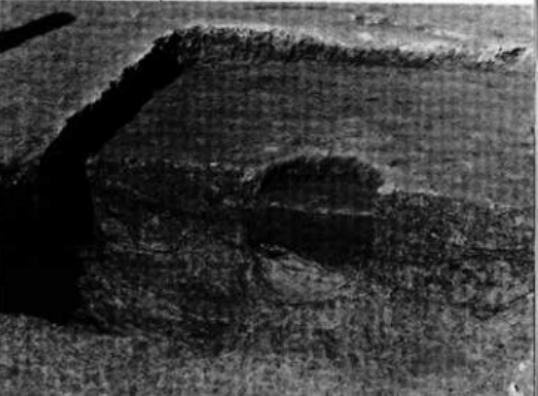
図版17 4次調査区
S A 33柵木列



図版18 4次調査区
D トレンチ S A33柵木列



図版19 4次調査区
S B 32建物跡柱穴断面



図版20 4次調査区
S B 31建物跡柱穴断面



図版21 7次調査区
全 観



図版22 7次調査区
S B51建物跡



図版23 7次調査区
S B51建物跡柱穴断面

圖版24 7次補足調查區
S B51建物跡、S A65柵木列



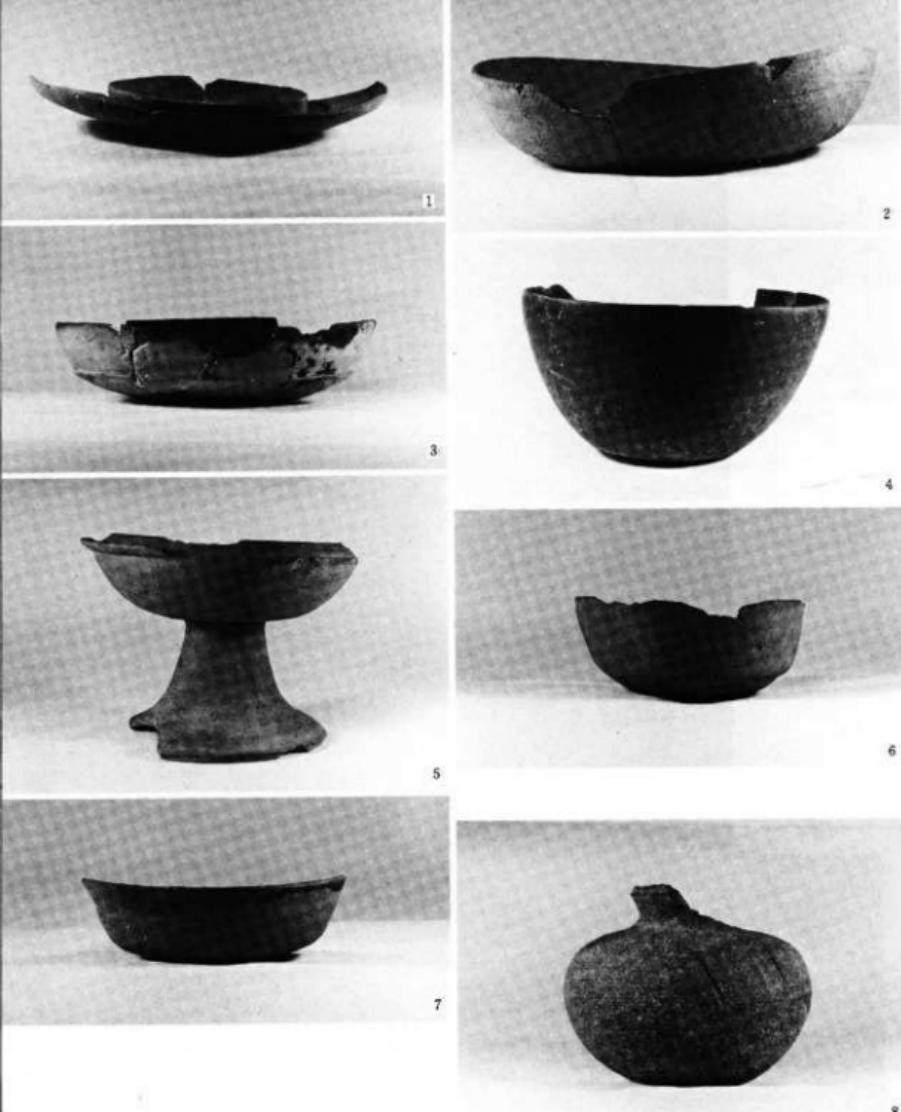
圖版25 7次補足調查區
S B51建物跡、S A65柵木列



圖版26 7次補足調查區 S B51建物跡 柱底面



圖版27 7次補足調查區 S B51建物跡 柱



图版28 1·2·6次调查区 出土遗物

- | | | | |
|--------|------------------|---------|-------------|
| 1 土師器蓋 | 1 次北区 | 5 須惠器高坏 | 1 次南区 |
| 2 須惠器坏 | 1 次北区 SK11 2层 | 6 須惠器坏 | 1 次南区 S 11 |
| 3 土師器坏 | 1 次南区 S 11 P. 65 | 7 須惠器坏 | 1 次北区 |
| 4 土師器底 | 1 次南区 S 11 | 8 須惠器壺 | 6 次北区 S 150 |



図版29 4・7次調査区 出土遺物

1 土師器环	4次A	S K47	4層	5 土師器环	7次	S D35	1層
2 土師器高环	4次A	2層		6 土師器环	+	9	+
3 鎏惠器底	4次D	S D35		7 土師器高环	+	+	+
4 土師器环	7次	S D35	1層	8 土師器高环	+	+	+



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

図版30 4・7次調査区 出土遺物

1	須恵器环	7次	S D35	1層	6	須恵器 瓢	7次	S D35	1層
2	須恵器环	*	*	*	7	土師器 瓢	*	*	3層
3	須恵器环	*	*	*	8	土師器 瓶	*	*	*
4	須恵器环	*	*	*	9	須恵器高台付环	*	S D53	1層
5	土師器环	*	*	*	10	土師器 瓶	4次	S K46 P2	*

「名取」 ハラ描き文字

職 員 錄

社会教育課

課長 永野昌一
主幹 早坂春一

文化財管理係

係長 鈴木昭三郎
主任 見山高文宏
主事 山口渡辺洋一
タク

文化財調査係

係長(兼) 早坂春一
教諭 加藤正範
主任 田中正則
タク 事務 沢城和一
タク 結婚 沢城みどり
教諭 論理 青沼一
主任 木原信一
タク 佐藤二
タク 金原一
タク 佐藤一
タク 工藤司
タク 渡辺一
タク 主婦 浜田一
タク 斎吉一
タク 野瀬一
タク 岡泰平

(56. 1 採用)

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物盛岡下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善光寺横六古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法源寺古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市高瀬臺町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山堂宮山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書（昭和53年3月）
第14集 乗用車跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北尾敷跡（昭和54年3月）
第18集 江川遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄開通分野調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開拓開拓歴史調査報告書1（昭和55年3月）
第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集 年報1（昭和55年3月）
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集 二神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集 年報2（昭和56年3月）
第29集 郡山跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）

仙台市文化財調査報告書第29集

昭和56年度

郡山遺跡I—昭和55年度発掘調査概報

昭和56年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市西区分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166
